論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	楊　嘉寧
学位授与の要件	学位規則第４条第[1]・２項該当		

論　文　題　目

第二言語による説明が話者自身の学習理解に及ぼす影響

論文審査担当者

主　　査　　教授　　井上　　弥
審査委員　　教授　　樋口　　聡
審査委員　　教授　　難波　博孝
審査委員　　教授　　児玉真樹子

〔論文審査の要旨〕

本論文は，第二言語での説明に焦点をあて，言語の使用によって認知的負荷が生じる場合に，説明することによって話者自身の学習理解が受ける影響を検討したものである。従来の説明に関する研究では，説明する過程において生じるメタレベルのモニタリング活動による認知的負荷を，聞き手である他者に分担してもらうことが，説明を行う話者自身の学習理解を深めるために不可欠であることが明らかにされてきた。しかし，第二言語での説明のように，言語の使用自体が認知的負荷となる場合に，説明することが理解促進効果をもつかについては，あまり検討されてこなかった。そこで本論文では，第二言語での説明という言語活動と，説明することによる理解の変容との関係を検討することで，第二言語での説明が話者自身の理解に及ぼす影響を明らかにし，さらに理解に役に立つ第二言語による説明の特徴を解明した上で，理解を促進できる第二言語での説明ができるようになる支援方法について検討している。

本論文は 5 つの章から構成されている。

第 1 章では，学習場面における「説明」の重要性を示し，説明が話者の理解を深める要因は，話者の認知的負荷が聞き手によって分担されたことにあること，話者の認知的負荷の低減が重要な要因であることを論じている。また，説明に伴う語彙の語尾活用の調整や，語彙と語彙の結びつき，上昇調か下降調かといったイントネーションの操作などといった多様で多くの言語的処理が存在し，このような言語的処理も認知的負荷となりうることを述べている。第二言語使用者にとって，言語的処理の認知的負荷は避けられないものであるにもかかわらず，言語的処理の認知的負荷が含まれる場合の説明効果があまり検討されていないことを指摘し，言語的処理の認知的負荷のかかった状態での説明の効果に関する研究の必要性を論じている。

第 2 章では，第二言語による説明が話者自身の理解に与える影響を明らかにするため，第二言語による説明を母語による説明と比較しながら研究を行っている。その際に，理解はテキストベースの理解とモデルの理解の 2 つの面から捉えられるとともに，理解の程度が測定形式によって影響されることが考慮されている。この第 2 章では，他者に向けた母語での説明は，先行研究と同じく話者自身の理解を深めるのに対し，第二言語では，他者に向けた説明の効果は見られないことを明らかにしている。第二言語で説明を行う場合，言語的処理の認知的負荷が

母語より高くなっているため，認知的負荷が聞き手によって分担されるはずの他者に向けた説明でも，言語処理負荷の低い母語の場合ほど内容を理解できず，他者に向けた説明による理解促進効果が見られないことを確認している。

第 3 章では，母語による説明と比較することにより，理解を深める説明の特徴を検討している。第二言語で説明する場合は，「メタ説明」「意味解釈の言及」の発話を多く生成していることが理解の程度に正の影響を及ぼし，「説明内容と直接関連しない発話」が理解度に負の影響を与えたことが明らかにされている。言語的処理自体の認知的負荷が高く，しかも同時に説明する内容について考慮しないといけないという，常に言語処理と思考を同時遂行する必要のある第二言語の説明においては，情報を付加しつつ慎重に説明を行うこと，説明進行状況をモニターすることの重要性が示されている。話の枠組みを整える方法及び情報の陳述に留まらない説明となるような支援をすることによって，第二言語での説明がより話者自身の理解促進に効果的である可能性が示唆されている。

第 4 章では，第 3 章で示された理解の深まりを促す第二言語での説明の特徴に基づき，第二言語による説明で話者の理解を深める支援方法とその効果を検討している。説明の構造化を支援する方法が効果的かつ不可欠であることが示されている。説明の構造化を支援する教示は，構造化するために説明文の内容について十分に思考し整理することを促すため，説明文自体の理解に対しても良い影響を及ぼすことが明らかにされている。また，説明の構造化を支援することで，第二言語で構造化された論理的な表現にすることが可能となるため，説明によって自分自身の考えが整理され，理解の促進に至ることが明らかにされている。

第 5 章では，第 2 章から第 4 章の実証的な研究結果に基づき，言語的処理の認知的負荷が含まれる説明の理解促進効果について総合的に考察している。第二言語に限らず，説明することが話者自身の理解に及ぼす影響を検討する際には，言語的処理自体の認知的負荷を考慮する必要性があることを指摘するとともに，認知的負荷が高い第二言語による説明の場合，適切な支援を提供することは重要であり，適切な支援があれば，第二言語による説明でも話者自身の理解を深める効果をもつ可能性があると論じている。

本論文は，以下の 3 点において高く評価することができる。即ち，(1) 言語処理自体の認知的負荷の観点から，第二言語による説明が話者自身の学習理解に及ぼす影響を特定したこと，(2) 第二言語での説明で理解が深まった学習者の説明に注目し，第二言語での説明で話者自身の理解を深める説明の特徴を明らかにしたこと，(3) その特徴に基づき効果的な支援方法を作成し，その効果を明らかにしたことの 3 点である。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与されるに十分な資格があるものと認められる。

平成 31 年 2 月 6 日